一宮市博物館だより

No.47 2011.3

もくじ

展覧会のご案内
特別展「墨コレクション~武士のファッション・陣羽織~」…… 2
企画展「硯ことはじめ」…… 3
博物館アルバム（平成22年度）…… 4
文化財保護事業 …… 7
平成23年度催し物のご案内…… 8

猩々緋花唐草文天鵞絨地三鱗紋陣羽織　江戸時代後期

特別展

墨コレクション

武士のファッション・陣羽織

平成23年4月29日（金・祝）～6月5日（日）

このたび、一宮市は江戸時代から近代までの毛織物約530点を集めた墨コレクションを収蔵することになりました。今回はその中から、武士が戦場での装いとして華を競った陣羽織に焦点を当ててその一部をご紹介します。

武将たちが覇を争った戦国時代、ファッションにおいても新しい装いが次々と生まれました。戦場での武装も、刀や薙刀による小集団戦から槍と鉄砲を主体とした集団密集戦へと変化するなか、大仰な大鎧から動きやすい当世具足へと移り変わっていきます。

戦国時代には戦場で個人をアピールするために奇抜な変わり兜や当世具足が作られましたが、具足の上から羽織った陣羽織の豊かな色彩や大胆なデザインはひと際眼を引きます。陣羽織は、衣袴の上に羽織る胴服から発展したもので、元々は防寒や防水を目的とした実用的な衣服です。手を動かしやすいように袖がなく、馬に乗るために深い背割れのある形のものが多くみられます。

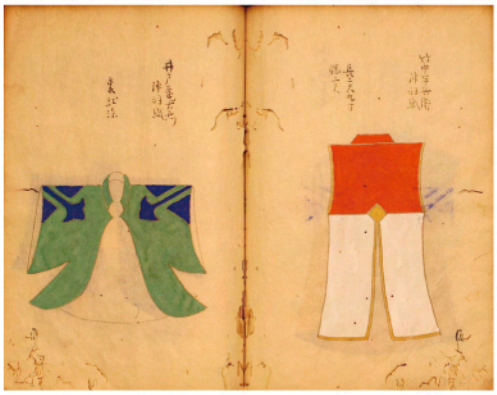
陣羽織は渋紙や毛皮で作られたものもありますが、多くは防水・防寒に優れた毛織物で作られています。毛織物は、ポルトガルやオランダとの南蛮貿易や中国との交易でしか手に入らない高級品でした。そのなかでも深い赤色の羅紗は猩々緋と呼ばれ、猩々（猿に似た伝説上の動物）の血で染めた不死の衣服として武士に好まれました。

陣羽織の奇抜な意匠には、洋套（マント）などの南蛮渡来の服飾も大きなインパクトを与えています。例えば、襟元や袖口のひだ飾り、ボタンによる前留め、胴服の通し衿に代わって立衿が用いられたり、脇下や袖が曲線を描いたりする点などです。

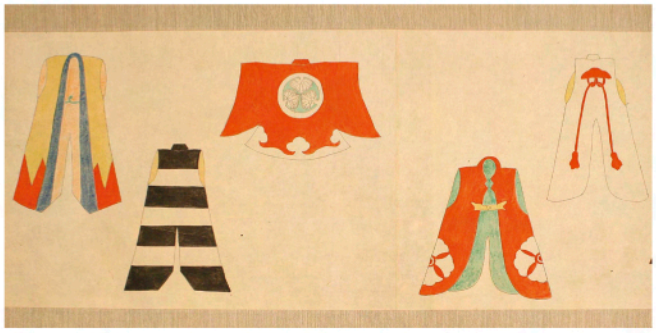
表生地の色合いだけでなく、裏生地や衿の裏に金襴・銀襴や型染め更紗など別の生地を使ったり、前留めの形や太刀受のデザインに工夫を凝らしたりなど、贅を尽くした細かな意匠にも見どころは多くあります。

この展覧会では、江戸初期の斬新な陣羽織から、幕末の洗練された陣羽織まで、約40点を展示するほか、陣羽織のデザイン集である雛形などを展示します。武士たちの戦いを彩った衣装の数々をぜひ間近でご覧ください。（成河端子）

白黒羅紗地段模様陣羽織　江戸時代初期



陣羽織図考　文化12年（1815）



陣羽織雛形　制作年不詳

Information

【休館日】
5月2日（月）・6日（金）・9日（月）・16日（月）・23日（月）・30日（月）

イベント

講演会

◆5月15日（日）「陣羽織と武家の美意識」
講師●深津　裕子氏（女子美術大学美術館　学芸員）

◆5月29日（日）「江戸時代の毛織物輸入とその受用」
講師●石田　千尋氏（鶴見大学　教授）

【時間】午後1時30分から3時
【場所】博物館講座室
【定員】100名（先着順）
【申込】当日正午より整理券を配布

企画展

硯ことはじめ

平成23年6月18日（土）～7月31日（日）

「文房四宝」といえば、筆・紙・硯・墨をさし、ものを書くための4つの宝として大事にされてきました。その中でも、硯は焼き物であったため、ほかの3つに比べて土に埋もれてしまっても残りやすいのが特徴です。

正倉院には、筆・墨・硯が伝世品として伝えられ、また正倉院文書などから当時使われていた紙についても材質や種類が判明しています。しかし、土の中からは、硯以外のものは条件がそろわない限り、めったに見つかることがありません。ごくまれに、胞衣壺から発見される例があります。胞衣とは、人間の胎盤のことをさしますが、いつの頃からか生まれた子どもの成長を願って、男の子であれば筆や墨、女の子であれば針や糸を一緒に埋納するようになりました。

一方、硯は土の中から見つかる可能性はほかの3つより高いのですが、発見される遺跡が限られています。日本で硯がつくられはじめた頃、硯は青灰色の須恵器という焼き物でできていました。硯には2種類あり、もともと須恵器の窯で、硯としてつくられたもののほかに、須恵器の容器の裏などを転用して硯として使用したものがあります。また、硯は現在とは異なり、当初は円形のものが製作されていました。文字を書く人々は限られており、そのため硯が出土する場所も、国衙やお寺に関係する場所に限られています。調査の成果から、官衙的な様相をもつ遺跡であれば円形のものを使用している率が高く、一般庶民的な宅地などでは須恵器の杯や蓋などを転用した硯を使用する場合が多いこともわかっています。

平安時代になると、硯は風字硯、そしてさらに現在書道の授業で使われているような方形のものへと変化します。そして焼き物から石製のものへと移り変わっていきます。しかし、尾張・美濃地域では猿投窯・美濃須衛窯などを中心として昔から窯業が盛んであった背景もあり、石製のものがつくられはじめても、焼き物の硯がつくり続けられます。

中世以降に特に多くみられますが、石硯の裏に文字だけでなく絵が線刻される例もあります。南蛮寺の跡地と考えられている京都市の姥柳町遺跡では、一風変わった石硯も発見されています（写真参照）。何を描いているように見えるでしょうか。

そのほか、現在残っている文房四宝に関する地名や伝承、祭事などには、どのようなものがあるのでしょうか。現在伝えられている文房四宝の製作技術も同時に紹介します。

書道が盛んであるといわれる一宮。本企画展を通して、文房四宝に関するさまざまなものに触れていただければ幸いです。（松本彩）

（左）円面硯　大毛池田遺跡
（右）猿面硯　田所遺跡

（左）二面硯　表
（右）二面硯　裏（「國新」のヘラ書き）
尾張国府跡（稲沢市教育委員会蔵）

石硯（「建長六年」銘）
稲沢市下津出土（個人蔵）

森春涛が使用したとされる古泥硯
（右）古泥硯　箱表書
（左）古泥硯・古泥硯蓋

石硯　姥柳町遺跡
（所蔵・写真提供：同志社大学歴史資料館）

亀山雪峰の書芸展

▼5月1日～5月16日

一宮市表彰条例による文化功労部門表彰者であり、一宮市書道協会会長を永く勤められた書道芸術家の亀山雪峰氏の作品を展示しました。当館では今回が3回目、書家としてははじめての企画になりました。

亀山雪峰氏は、林雪骨、金子清超、青山杉雨の各先生に師事され、日展や全国書展で活躍し、伝統の書法を研究されました。一方、時代の変化にのっとり、書に彩色を施した「彩色書」を創作し、これを大いに展開されておられます。

今回の展示では、氏の永年の研鑽の中からそれぞれの代表作を中心に76点を展観しました。伝統とその中に興った新しい芽との妙は、多くの来館者に活力を与えてくれました。

特別展 円空展

▼5月22日～7月11日

江戸時代初期の遊行僧円空（1632～1695）は、美濃国（現在の岐阜県）に生まれ、若くして出家し、12万体の彫像を作ることを発起して、日本各地を行脚するようになります。

円空が制作した神仏像は、慈愛に満ちた穏やかな像、また厳しさを内に秘めた激しい表情の像など、庶民の信仰の対象として親しまれ、現代でも人々を惹きつけてやまないものがあります。円空が訪れて、作品を残した地域は、中部地方から北海道、東北、関東、近畿各地に及び、神社仏閣はもちろんのこと、庶民が生活する家にも、さまざまな種類の像が残されてきました。現在までに5200体余りが確認されており、調査はいまも続けられています。

今回の展覧会では地元一宮市に伝わる円空仏と愛知県、岐阜県を中心に残された約70点を陳列し、この地に遺された円空を見ていただきました。会期中の6月6日（日）には、円空学会理事長　長谷川公茂氏による講演会「円空の生涯」を博物館隣接の妙興寺公民館で開催、300人以上の方が熱心に聴講されました。学芸員によるギャラリートークも6月13日（日）と27日（日）に開催し、円空の生涯、そして作品についてをたくさんの方に知っていただきました。

2010一宮美術作家協会展

▼8月28日～9月12日

一宮美術作家協会に所属する作家のうち54人が最新のイメージの試作を展開した作品60点を展示しました。特別展示は、すぎもと和さん、梶浦寿布さんの作品が展示されました。絵画・平面、彫塑・立体、デザイン・工芸と各作家の個性あふれる多彩な作風を楽しむことができました。

一宮写真協会選抜写真展

▼9月16日～9月26日

一宮写真協会より選抜された33人による写真展を開催しました。

「はじまりは　いつも　感動。」を今年度のテーマにそれぞれの作者の鋭い感性に裏打ちされた表現力に、熱い思いを込めた作品76点が展示されました。モノクロ、カラーを問わず、作品のもつ力に来場者は見入っていました。

企画展 2010一宮市現代作家美術秀選展

▼12月4日～12月19日

展覧会は第68回一宮市美術展の成果等をうけて、一宮市美術展での各部門の依頼出品者と市長賞受賞者11名、ならびに各協会からの推薦者の作品をあわせて84点を展示いたしました。この展覧会は、今回が10回目となります。

館内の特別展示室、ラウンジ、講座室、ギャラリーなどを使用して、柔らかな光を取り込んだ落ち着いた展示室の中で2400人を越える来場者のみなさんに出品者たちのこの一年の充実した成果を楽しんでいただきました。

特別展 木曽川をめぐる人と文化

▼10月9日～11月21日

木曽川は長野県木祖村の鉢盛山を源流とし、岐阜県、愛知県、三重県、そして伊勢湾へと注ぐ全長229kmにおよぶ大河川です。一宮市域は木曽川左岸に位置し、扇状地河川から沖積地河川となる転換点にあります。そのため、豊富な水をたたえる木曽川を利用した人の暮らしや文化が古くから営まれてきました。

そこで本展覧会では、人々が木曽川をどのように利用し暮らしてきたかを、民俗・歴史資料を中心に紹介し、その暮らしを生んだ自然環境についても考えることで、木曽川とその流域に暮らした人々の歴史を明らかにしました。会期中には講演会・シンポジウム・観察会を開催しました。

会期中の催事

■記念講演会
『木曽川をめぐる歴史と文化』… 10月10日(日)
講　師／岐阜市立女子短期大学学長　松田之利氏　参加者／112人

■木曽川シンポジウム・自然編
『木曽川の自然と文化』……10月24日(日)
コーディネーター／岐阜経済大学教授　森誠一氏　参加者／63人
パネリスト　(独)土木研究所自然共生研究センター長　萱場祐一氏
木曽三川フォーラム　可児幸彦氏
岐阜県世界淡水魚水族館チーフキュレーター　池谷幸樹氏
木曽川漁業協同組合代表監事　大川禧代司氏

■木曽川シンポジウム・歴史編
『木曽川の歴史と文化』……11月　7日(日)
コーディネーター／信州大学副学長　笹本正治氏　参加者／90人
パネリスト　一宮市博物館元館長　岩野見司氏
愛知学院大学非常勤講師　赤羽一郎氏
愛知県史近世史部会特別調査委員　杉本精宏氏
岐阜市立芥見小学校 松田千晴氏

■自然と歴史の観察会・自然編
『木曽川を渡船で渡ろう!』……10月17日(日)
講　師／一宮市文化財保護審議会委員　近藤修氏　参加者／31人

■自然と歴史の観察会・歴史編
『新発見!木曽川流域小旅行』……11月14日(日)
講　師／一宮市文化財保護審議会委員　小川一朗氏　参加者／34人

■展示室

■記念講演会

■木曽川シンポジウム・自然編

■木曽川シンポジウム・歴史編

■自然と歴史の観察会・自然編

■自然と歴史の観察会・歴史編

企画展 くらしの道具～今と昔～

▼1月8日～3月13日

■展示室

本展覧会は歴史を学び始める小学生を対象に企画し、今回で19回目となります。展示は、衣・食・住に関わる民俗資料を中心とし、さらには山間部や海浜部など自然環境が異なる地域の資料と比較することにより、自然環境による生活道具や暮らしの違いについても紹介しました。

会期中には、市内の小学校3・4年生約8000人が来館し、ワラ1本でできる刀作りを体験したり、暮らしの道具の今と昔の違いを学びました。

日曜日に実施した3回の講座では、実際に日頃食べたことのない味に触れたりすることによって、学習をより深めることができたと思います。

■1／30(日)
海の暮らしを体験！
茶色の生ワカメが、熱湯から上げると緑色に変身！このほかに、海の暮らしのお話を聞いたり、ゴンドウ汁を味わったりしました。
参加者：337人

■2／13(日)　平野の暮らしを体験！
カラサオの使い方を習い、実際に体験。このほかにに、平野の暮らしのお話を聞いたり、クドで炊いたゴモクメシやモロコの押しずしを味わったりしました。
参加者：282人

■1／16(日)　山の暮らしを体験！
ほおばめしを作っているところ。このほかに、山のお話を聞いたり、ゴヘイモチやすんき汁も味わいました。
参加者：119人

博物館講座 尾張平野を語る15

▼2月27日・3月6日・13日

これまで、本講座では14回にわたり、自然・考古・民俗・歴史・美術工芸などさまざまな分野の講師をお招きして講演会を行い、尾張平野の歴史と文化について考えてきました。

15回目となる今回は織物にスポットをあて、使われた道具や生産の社会的背景など、広い視野から織物生産をとらえて、尾張平野の特徴を考えました。

■平成23年2月27日(日)
「紡ぎと織りの古代史～伊勢・尾張・遠江を中心に～」
講師　京都大学総合博物館　研究員　東村純子氏

■平成23年3月6日(日)
①「法を伝え心をつなぐ衣～袈裟～」
講師　妙興報恩禅寺　住職　稲垣宗久氏
②「袈裟に見る染織の魅力」
講師　京都国立博物館　主任研究員　山川　暁氏
※同時開催　つむぎ茶屋(博物館和室)

■平成23年3月13日(日)
「明治時代の尾西織物業を主導したのは?～尾西織物同業組合の設立をめぐって～」
講師　名古屋文理大学短期大学部　教授　伴野泰弘氏
※同時開催　鈴鹿毛織所蔵資料三二展示

■2月27日　東村純子氏講演

■3月6日　つむぎ茶屋

■3月6日　稲垣宗久氏講演

■3月13日　伴野泰弘氏講演

■3月6日　山川暁氏講演

■3月13日　鈴木貴詞氏による展示説明会

民俗芸能公演

▼3月27日

一宮市域には、江戸時代より続く民俗芸能や祭りが伝承されています。博物館では、民俗芸能の普及のため、毎年公演を行っています。今回は県指定無形民俗文化財「ばしょう踊」、市指定無形文化財「島文楽」「住吉踊」の公演を行いました。

古文書講座

▼平成22年5月～平成23年2月

5月から新しく18名の方を迎え42名でスタートしました。萩原町築込加藤家文書をテキストに、くずし字の読み方を覚えながら、江戸時代の人々の暮らしについても学習を進めました。村の心得や入用帳の読解からは村人たちのリアルな生活が感じ取れ、思わず会場に笑みがあふれることもありました。3回生の内、年間6回以上出席された9名の方に古文書講座の修了証をお渡ししました。

Museum Kids Club

▼通年

市内の小学校4年生～6年生を対象に、歴史、民俗、考古、自然、美術などの多様な分野を総合的に学ぶ講座です。今年度はみのかも文化の森(市民ミュージアム)において自然観察会・考古学の体験講座を受講し、昼食にはクドで炊いたご飯を食べるという盛りだくさんの講座や、やきものの歴史を学んだ後に煎茶道を体験するという講座を実施しました。

■美濃加茂市民ミュージアムにて

■煎茶道の体験

文化財めぐり

▼11月5日

市民のみなさんに、郷土の貴重な財産である文化財を紹介して、文化財愛護の精神を高めていただくために、昭和42年以来毎年「市民文化財めぐり」を開催しています。

46回目になる今回は、木曽川河畔に位置する北方代官所跡をスタートに、籠守勝手神社～法蓮寺の山内氏墓所～黒田城跡～木曽川資料館～賀茂神社～三岸節子美術館(特別展「三岸節子展－色彩のエスプリ」見学)～博物館(特別展「木曽川をめぐる人と文化」)という市内の北西部に存在する指定文化財を中心として見学するコースでした。

23名の参加者の方々は、それぞれの文化財を前に、講師の市文化財保護審議会委員による解説を熱心に聞き入っておられ、秋の清々しい一日、市内の文化財への思いを新たにしていただきました。

文化財パトロール 文化財防火訓練

▼1月20日
▼1月26日

昭和24年1月26日に奈良・法隆寺の金堂壁画が焼失しました。以来この日を「文化財防火デー」と定め、防災意識の高揚のため各種行事を開催し、今年度は57回目にあたります。

市教育委員会は消防本部とともに1月20日に文化財管理者宅での防火、消防設備点検をする文化財防火パトロールを、1月26日には防火訓練・文化財管理者研修会を実施しました。

防火訓練は、妙興報恩禅寺(大和町妙興寺)を会場にして妙興報恩禅寺関係者、文化財管理者、地元町内会、市消防職員、教育委員会などの方々が中心となって行われ、市民や大和東保育園児など多くの参加、見学がありました。

平成22年7月21日に、今伊勢町馬寄の石刀祭と瀬部臼台祭が新たに一宮市無形民俗文化財となりました。

一宮市新指定文化財

◇石刀祭

石刀祭は、一宮市の北部、今伊勢町馬寄に鎮座する石刀神社で毎年4月に行われる祭礼です。江戸時代には、8月19日に祭礼が行われていましたが、現在では、4月19日に頭人行事を含む例祭を、その後の日曜日に山車奉納・献馬を行っています。尾張地方における山車祭礼と馬の塔・頭人という祭礼行事の特色をよく伝えている祭りです。

祭礼の中心となるのは山車奉納と献馬で、大聖車・中屋敷車・山之小路車の三輌がからくり人形を奉納し、大聖・更屋敷・呑光寺・山之小路・六地蔵・吉田の六瀬古が馬を現在でも奉納（馬の塔・オマント）しています。戦前は山車が5輌ありましたが、第二次世界大戦の空襲の際に、更屋敷車・呑光寺車が焼失してしまいました。現在、真っ黒に焼け焦げた更屋敷車の車輪が博物館に残っています。

馬に関する行事として、本来の「馬の塔」が消えつつある中、馬道具を馬に付け道行をするこの祭りは、非常に貴重です。特に、「吉田の駆けぬき」と呼ばれ、祭礼最後に馬を走らせる行事は、他になく圧巻です。

さらに、石刀神社を中心とする瀬古組織のしきたりは、古来の伝統を継承するもので、祭礼のあり方が変容しつつある現代にあって、非常に貴重で、今後も残していかなければならない文化財です。

■石刀祭　山車3輌出揃い

■大聖瀬古　馬道具を付けた馬

■頭人祭　頭人と堅固

◇臼台祭

臼台祭は、一宮市東部、瀬部観音寺・八剱社で毎年8月16日に行われる祭礼です。従来は、旧暦7月10日の観音様の命日に行われていました。昔、近江の竹生島から隣接する観音寺境内の大銀杏に観音様の仏頭が飛来し、清浄な挽臼の上に安置し祀ったことに由来するという伝承があります。また江戸時代の終わり頃、瀬部中島の庄屋熊沢嘉右エ門氏が、子どもたちに何かを見せたいと、臼の上に提灯をたて点火し臼を回して見せたのが提灯を回すようになった始まりとも言われています。明治時代初期に観音寺の行事として山車の曳き回しの許可が警察から下りなかったため、隣接する八剱社との合同の祭礼となりました。

祭礼では、5瀬古（本郷・中島・下市場・四日市場・上之郷）から大提灯（高張提灯）を先頭に太鼓車に太鼓を載せて、お囃子をしながら八剱社境内に各瀬古が参入します。その後、月の数12・日の数365の提灯を山車に付け、笛・太鼓のお囃子に合わせて提灯を挽臼のように回しながら、神社境内を曳き回します。平成4年、古い木製の山車を新調し、輪をゴムタイヤに変え、提灯を差す竹籠をステンレス製にして現在に至っていますが、現在でも和蝋燭・提灯を使用し、祭礼を行っています。

尾張津島天王祭に代表される巻藁提灯飾りの部分を臼のように回転させるのは、津島でも見られないもので、周辺へ伝わってから発達しました。5町内（瀬古）が協力してお囃子を現在まで伝承し、祭礼が地域住民のまとまる大きな活動の場となっているのが特徴的で、今後も伝えていきたい文化財です。

■臼台祭

■タイコグルマとお囃子

平成23年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

特別展 市制施行90周年記念 墨コレクション ～武士のファッション・陣羽織～

▼4月29日(金・祝)～6月5日(日)

一宮の地は古くから繊維産業で栄え、明治時代の濃尾大地震以後、毛織物の一大生産地として発展してきました。この度、一宮市では毛織物コレクションとしては日本有数である墨コレクションを購入しました。約530点にも上るコレクションの中から、今回は武士が戦場での装いとして華を競った陣羽織に焦点を当ててその一部をご紹介します。

企画展 硯ことはじめ

▼6月18日(土)～7月31日(日)

尾張・美濃地域では、古代から硯が生産されてきました。本企画展では都から出土する硯と対比させつつ、古代から現代に至るまでの硯の変化を、南蛮文化に関わる文房具や硯に関わる伝承、現代の伝統工芸などとともに紹介します。

2011一宮美術作家協会展

▼9月3日(土)～9月18日(日)

一宮美術作家協会会員による最新の発想でイメージの試作を展開した絵画・平面、彫塑・立体、デザイン、工芸の力作を展示します。

一宮写真協会展

▼9月22日(木)～10月2日(日)

感性に裏打ちされた表現力で、熱い思いを込めた写真作品を展示します。

特別展 市制施行90周年記念 絹谷幸二展

▼10月8日(土)～11月27日(日)

絹谷幸二氏は、現代日本の洋画界の牽引者です。作品を通じてさまざまなメッセージを発信し、同時代を記録し、また未来へとその思いを託しています。

一宮市博物館開館にあわせエントランスには「あやなすまち一宮、ひと、ひと、ひとともよう」と題されたアフレスコ画が描かれています。初期から現在に至る絹谷氏のさまざまな作品からその魅力、思いをご覧いただきます。

企画展 2011一宮市現代作家美術秀選展

▼12月3日(土)～12月18日(日)

2011年に開催される第69回一宮市美術展の成果等を受けて、一宮市美術展依頼出品者・市長賞受賞者、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者の作品を展示します。

企画展 暮らしの中の民具～竹細工

▼1月7日(土)～2月26日(日)

一宮市瀬部は、近代まで竹細工の生産地としてよく知られていました。しかし、現在ではその伝統も途絶えつつあります。

本展示では木製や竹製のカゴ・ザルの歴史を紐解き、さらには村々の農家の副業として発展していった様子を、市域の竹細工の歴史を含めて紹介します。

講座

通年講座 古文書講座

▼平成23年5月～平成24年2月

一宮市博物館で保管している江戸期の古文書をテキストとして使用し、古文書の読解力を養うと共に、その歴史的背景を学びます。

通年講座 Museum Kids Club

歴史学や民俗学、考古学、自然、美術などに興味のある子どもたちを対象に、総合的に学ぶことを目的とする活動。見学会・体験学習などさまざまな活動を盛り込み、考え方を育てます。

講座 尾張平野を語る16

▼2月5日(日)・2月12日(日)・2月19日(日)

本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野―特に尾張平野について考えてきました。16回目となる今回は、「歴史学と博物館～尾張から発信する」をテーマに、尾張平野の歴史を考えます。

講座 市民文化財めぐり

▼11月初旬予定

市内にある文化財のうちいくつかを、文化財保護審議会委員の解説により観覧します。

公演 民俗芸能公演

▼2月26日(日)

一宮市域に残る指定無形(民俗)文化財の公演を行います。

一宮市博物館だより

第47号

発行日／平成23年3月31日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／三井堂株式会社

利用案内

[休館日]毎週月曜日、休日の翌日
[開館時間]午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
[観覧料](常設展・聴講料含む)一般200円(160円)、高校・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)
※( )内は20人以上の団体料金
※一宮市内小・中学生は無料
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

〒491-0922　愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215　FAX0586-46-3216
URL http://www.icm-jp.com/

[交通]名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩7分
ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分